

《書籍企画書》 提出者: マイケル花子

【タイトル】 巨樹のきずな ～クスノキが伝える神様のメッセージ～

【概要】

木は、ただそこに生えているだけの存在ではない。

古来より人々は、木を神々のメッセンジャーとし、その言葉を受け取ってきた。

特に、巨樹は時代を超えて人々の絆を結び、命を守る存在として語り継がれている。

本書では、巨樹と人との関わりを通じて、「木が教えてくれること」を探る。

【テーマ】

- 巨樹がどのように人の心をつなぎ、未来に影響を与えるのか
- 木々が伝えてきた歴史や神話、そして現代に生きる私たちへのメッセージ
- 木の持つエネルギーを感じ、より良く生きるためのヒント
「なんとなく生きてきたけれど、何か足りない」
そんなふうを感じる人に向けて、木々がくれる気づきを共有する一冊。

【想定する読者ターゲット】

- 何かを成し遂げたわけではないが、人生に物足りなさを感じている人
- 自分の「好き」や「生きがい」が不明瞭な人
- 自然や神話、歴史に興味があるが、専門知識がなくても読める本を求めている人
- 木や森に不思議な魅力を感じるが、その理由を深く考えたことがない人

【構成案】

第1章: クスノキは神々のメッセンジャー

- 古代の人々にとって「木」とは何だったのか
- クスノキが象徴するもの
- 神話の中の木々（スサノオと木々の創造、天の神々と樹木の関係）
- マイケル・ジャクソンと木の絆

第2章: 楠をめぐる歴史 ～夢のお告げ

- 後醍醐天皇が夢のお告げを受けて見出した楠木正成
- 景行天皇など歴代の天皇などが刻んできたクスノキのきずな
- 楠木一族と後醍醐天皇の「絆」
- みくまりの神と龍神としての素戔嗚

第3章: 大楠の神さまがくれる生きるヒント

- 大楠はなぜ神聖視されるのか
- クスノキが持つ不思議な力と頭脳
- 「クスノキの神さま」が私たちに教えてくれること
- 大楠に触れることで感じた変化

第4章: 巨樹 ～好きな木の見分け方～

- 巨樹に惹かれる理由を知る
- 姓名・生まれた土地・親戚・出会ってきた人との関係で判断する方法
- なぜ特定の巨樹に惹かれるのか？ それの意味するもの
- 自分と相性のいい巨樹を見つけるポイント
- 日本各地の代表的な巨樹（杉、松、榎、クリなど）とそのエネルギー

第5章: 巨樹と共に

- 命を守る木の絆の本質
- これからの時代、「木」と「人」が繋ぐ役割
- 思いや絆を保存する木に託す
- 楠学問 ～木が教える実践の学び～
- 巨樹と共に豊かで平和に生きる

【サンプル原稿】

第1章 木は神々のメッセンジャー

神社の境内にそびえ立つ巨樹を見上げたことがあるだろうか。その姿はまるで、何百年も前から人々の暮らしを見守ってきたような、重厚な存在感を放っている。不思議なことに、ただその根元に立っているだけで、心が落ち着くような気がする。ひんやりとした空気、幹に刻まれた無数の年輪、そして天高く伸びる枝葉が、まるでこの場所が特別な空間であることを私たちに伝えているかのようだ。

昔の人々は、木に「神」が宿ると信じていた。スサノオノミコトは、自らの髪の毛を大地に埋め、「これが木となり、人々を支えるものになる」と語ったという。そこから生まれたのが、杉、ヒノキ、マキ、そしてクスノキである。スサノオが創り出した木々は、長い歴史の中で、人々の暮らしを支え、守り、見守ってきた。

木は、ただそこに立っているだけではない。人々の祈りを受け止め、時には願いを叶える存在として崇められてきた。例えば、古代より「御神木」として祀られてきた木々は、人々の心の拠り所であり、地域の象徴でもあった。ある村では、一本のクスノキの下で村の長が決定を下し、またある場所では、長寿の木のもとに集まり、豊作を祈る祭りが開かれた。

巨樹は、時に神聖視され、また時に人々の生活の中心として機能してきた。鎮守の森に植えられた大樹は、集落を守る存在とされ、その森が消えてしまうことは、神々の加護を失うことと同義だった。木々は風を防ぎ、雨を蓄え、暑さを和らげるだけでなく、精神的な安らぎをもたらす特別な存在だったのだ。

神話だけではない。日本各地には、樹齢千年を超える巨樹が数多く存在する。屋久島の縄文杉、鹿児島島の蒲生の大楠、岐阜の淡墨桜など、それぞれの木には長い歴史と人々との物語が刻まれている。例えば、蒲生の大楠は、平安時代からこの地に根を張り、多くの人々がその下で祈りを捧げたとされる。また、淡墨桜は、散る際に淡い墨色へと変わることから「死者の魂が宿る桜」として語り継がれ、多くの人々がこの木に手を合わせてきた。

こうした巨樹は、単なる自然物ではなく、まるで時を超えて私たちと対話する存在のように思える。彼らは何も語らない。しかし、長い時を経てなお、静かに立ち続ける姿には、時代を超えた何かを伝えようとしているように感じられる。

また、巨樹はその地域の「記憶」を保持しているとも言われる。戦国時代、ある武将が戦の前に大木に手を当て、勝利を祈ったという記録が残っている。また、江戸時代の旅人が、街道沿いの大木の根元で休息を取り、そこで交わされた言葉が長い歴史の中で受け継がれていったとも言われている。木々は、その場に立ち続けることで、人々の歴史と記憶を蓄積し、次の世代へと伝えていくのだ。

かつて、人々は木々と共に生きていた。木材として家を建て、薪として暖を取り、そして神聖な存在として崇拝した。しかし、現代において、私たちは木々の存在をどれほど意識しているだろうか。都市の拡大とともに、巨樹の姿を目にする機会は減り、木々が持つ本来の意味を忘れ去りつつある。

それでも、神社の境内や古い寺院の裏手にそびえ立つ巨樹に出会うと、なぜか立ち止まりたくなる。手を触れてみると、驚くほど冷たく、それでいてどこか温かい感触がある。その木が何百年、あるいは千年以上も生き続けてきたことを思うと、言葉にできない畏敬の念が湧いてくる。

「木は神々のメッセンジャー」

この言葉を胸に刻んで、もう一度、巨樹を見上げてみよう。風にそよぐ葉の音、枝の間から差し込む光、幹の年輪に刻まれた時間。それらは、目に見えない絆の証であり、私たちに語りかける「神々のメッセージ」なのかもしれない。